

桜蔭俳話会 九月句会(第二七九回) 於桜蔭会館

平成二十一年九月二十七日

- 3点①書き留めてしまへば過去や木の実降る 守
 3点 み仏のまなざし胸に古都の秋 溪水
 2点①終電まで職場の句会林火の忌 貞勝
 月揚げて月をこぼせる水車かな 守
 塵坑につづく塵線山む 貞勝
 2点 コスモスを透かし向うに過去の見ゆ 幸枝
 焼くときの無心を愛す秋刀魚かな 守
 はかどらぬ話につるべ落しかな 幸
 水乾くやうにひと逝き白式部 守
 風抜くる本陣跡や猫じやらし 秀一
 1点①新涼や玉溢るごとピアノの音 ヤエ子
 吹きぬけし風胸に有り秋団扇 文枝
 鯛雲堅き握手を交しけり 溪水
 1点 長生きもほどほどがよし白芙蓉 与史
 秋の蚊と連れになりたる露天風呂 秀一
 秋の声横丁多き宿場まち 秀一
 富士山を詩吟一曲秋の朝 真三
 灯火親し一家で使ふ電子辞書 与史
 空澄むや磚子かがやく送電塔 貞勝
 秋旱日曬農夫の水運び 溪水
 ギャラリーの水彩画良し紅葉かな 真三
 水引の花微風をも捉へけり 幸枝
 夏惜しみ夕波洗ふペンダント 幸
 ※ 小さき庭虎刈となり秋芝生 ヤエ子
 見はるかす合併の村秋ざくら 秀一
 閑寂たり蝸の声止みしあと 幸枝
 蔵屋敷小さな池と萩の花 文枝
 木槿咲く道少しだけ遠回り 与史
 草むしり仕残す釣瓶落としかな 溪水
 蓮咲くや静寂にして朱印寺 幸

- 温泉湯ひしやくに受けて秋澄めり 秀一
 花店に見かけなくなり男郎花 幸枝
 乱れ萩艶めいてをり尾の寺 文枝
 鬼灯やひ孫待たるる色づきに 溪水
 爽かに欄干とどく滝の音 真三
 帆柱の影ゆらゆらと秋の湾 ヤエ子
 去ぬ燕見返る蔵の目塗台 貞勝
 背伸びしてシーツを干すや鯛雲 幸枝
 山の手も下町もなし霧深し 守
 木槿咲く国より来た娘けなげなり ヤエ子
 秋郊に黄金みちたり広々と 文枝
 還らざる日を知つてみる貝風鈴 幸
 秋天を貫くメタセコイヤかな 与史
 飴一こ渡されし峠秋の風 文枝
 大鍋を起重機で据ゑ芋煮会 貞勝
 ショパン聞き句作り悩む秋霰^{こぶ}雨 ヤエ子

不在投句 瀬戸溪水、野上貞勝、稲葉幸